

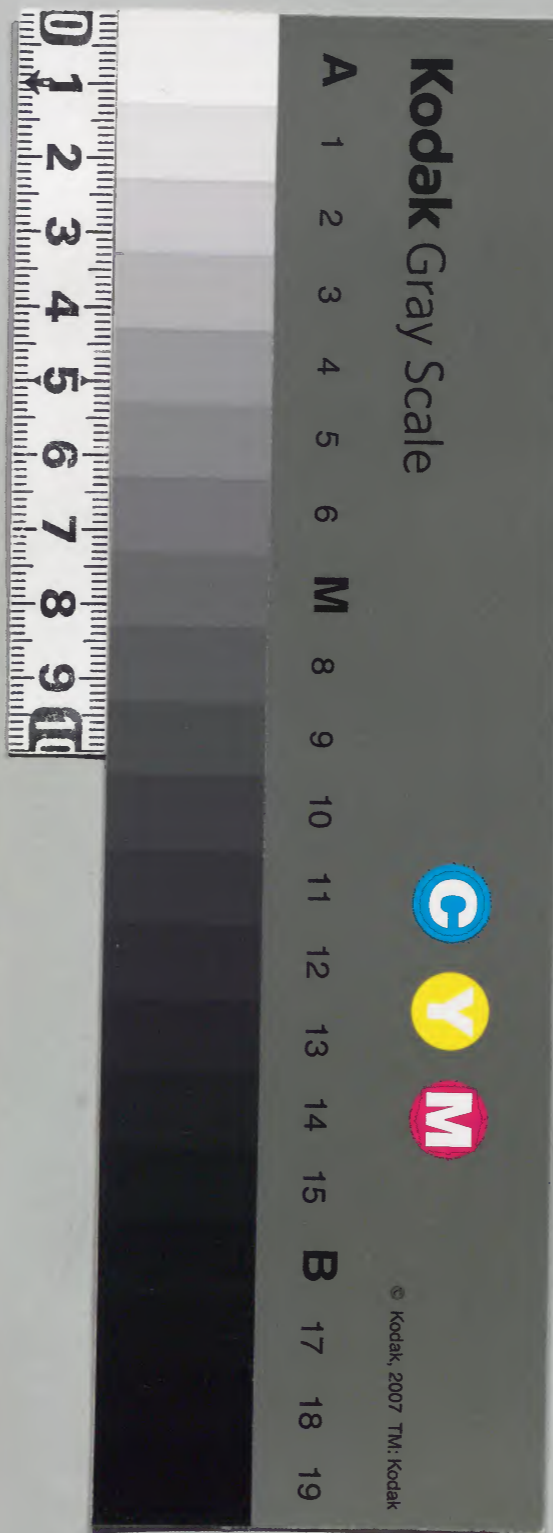
日本書紀傳 卅一卷_{十三}

和書
一〇五二二號

百三十五

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (144)
函號	特 85 1

内一六八三號



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

大社志

内一六八三號

南政官
大社志
大社志
大社志

此中小御歳社有り祭神味耜高彥根神武夷鳥命二神
の荒魂を祭ると云ふハ大社志ハ謂ゆる御歳社あり
可きハ其外大歳社也見社出雲井社など見えたりこ
雖も式社ハ非ず右件杵築大社の御事を長く
注し奉れりハ中昔より以降當今ニ雖も然ら由無き寺院
ふどの事云へハ古例を逐て造営らし事おて其甚
しき小至りてハ天皇の御舎ハ何層も勝れて廣
大なる事おてハ有れども人此を馴て恠しと爲さる
を此神宮の御事など今ハ如此く古の事實の明らふ成以行ふ就てハ天皇の御舎の如く作成
し奉らせ給ふ可き復古の御政不及ばせ給ふ愛なき

日本書紀傳三十一

〇七百二十五

大御世小遇奉_るより小非りければ切て天下の
 惑ひをた小解置むとて神小質して予が疑はざる所
 を述る者あり自余の小事ハ予が述べ限小非ず又神
 中_の所_に人_の神_の現_事事_の顯_事事_の御_政を_布せ_御在_し給_ひて_此神
 宮_小て_ハ神_事幽_事の_御政_を布_せ御_在し_給ひ_て此_神
 万_國小_在こ_有ゆ_る人_民の_上小_一日_片時_の間_こ雖_も
 漏_奉る_事能_ハぶ_る御_事小_ハ在_けれ_ば其_一二_を注_し
 奉_る却_りて_大神_の廣_大多_御上_を獲_むる_小至_りて_幽
 事_の御_事を_委曲_小注_し奉_りて_む因_こ小_至り_て此_小ハ
 注_さる_{あり}

古事記曰如此之白而於出雲國之多藝志之小濱造天之御
 舍_多藝_志三_舍字_以音_三而水戸神之孫櫛八玉神為膳夫獻天御饗食之時

禱白而櫛八玉神化鷄入海底咋出底之波迹此二字作天ハ
 十毘良迦此三字而錄海布之柄作燧白以海專之柄作燧杵
 而鑽出火云是我所燧火者於高天原者神產巢日御祖命之
 登陀流天之新巢巢之凝烟訓凝烟之ハ拳重摩豆燒舉摩豆字以音
 地下者於底津石根燒凝而栲繩之千尋繩打延為釣海人之
 口大之尾翼鯿訓鯿云佐和佐和迹此五字控依騰而打竹之
 登遠遠登遠遠迹此七字獻天之真名咋也

此ハ上六百二十小舉た_る續_るる_右小唯僕住所者
 如天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢云々
 而治賜者必有其大神の鎮定らせ御在し坐す御在

所を天神小乞奉らせ給へりて此小於出雲國之多
藝志之小濱造天之御舍に有即其登陀流天之御巢
を天神より令造給へりて此小於出雲國之多
か如く此第二一書小皇祖天神より又沙應住天日隅
宮者今當供造云くと有る小當此所あり然る時此
より以前小經津主神武甕槌神の天上へ還上らせ御
在り坐て皇祖天神の御許小其大國主神の乞奉らせ
給へりし事共を聞え上げ又其御趣けを承はり還降
らせ給へり後小此天之御舍ハ一も造奉らせ給へり
ありけ此ハ此小も二神の中頃小て天上小参り通ハ

御在り坐て此小天神三國神との御中を執持せ奉
給へり御事の無てハ得有べくぬを傳りぬハ漏
たり者之所見たり此文例ハ其玉垣宮段小本年都和
氣命の御言語為させ給ハさりりハ於是天皇惠賜
而御寢之時覺て御夢曰修理我宮如天皇之御舍者御
子必眞事登波牟如此覺時布斗摩逆ニ相而求何神
之心尔崇出雲大神之御心故其御子令曰其大神宮
將遣之略於是覆奏言因辨大神大御子物詔故参上來
故天皇歡喜即返菟上王令造神宮と有る小似たり此ハ
幽顯境を異小爲り世の事なり事の運小於てハ少

り違ふ可くさるあり修理我宮如天皇之御舎とハ
右の唯僕住所者云々之を奉らせ給へり小等しく如
此覺時云々ハ此小如此之(向)白而と有小當り返菟上
王ハ二神の皇祖天神の大命を負持して天日隅宮を
造奉り小天降らせ給へり事第二一書の如くあり小
當り可く然して令造神宮と有ハ此の造天之御舎と
云と事の狀相同しきを以て此小ニ神ハ天上小往來
して其御中執持せ給へり傳の古事記ハ脱たり
と云事を明らむ可し予し始ハ多藝志之小濱と云
リ故小此天之御舎と云ハ梓築の古名あり事を知
北たる事と思ひ故小此事ハ然計りカカを入ら

りしを況て其餘の人等の説ハ然ルハ如此之白而ハ
至てハ云限ハ非ハ僻事なり然ルハ如此之白而ハ
如此と讀べりず此之白賜比志如而と訓べき所
あり記傳十四ハ丁小如此之白而乃隱也故隨白而
文を成して其説ハ云ハ此七字ハ今已ハ補へたりふ
り然補ふ所以ハ先如此之白而と云よでハ大國主
神の上より云ハ語次ハ於出雲國之云ハハ轉り
て天神御子の詔命以て此神を令祭給ふ方より云ハ
語あり凡て然此と彼との事の轉ハ際ハハ必語の界
限有り事あり小此ハ本の任みてハ此間ハ其界限無
カ故小如此之白而於出雲國之云ハハ献天之真名昨

也と云ふまで續小成て大國主神の爲給ふ事小成て
理剛叶いざれば如此之白而の下小此より彼へ轉る
界限無て有りへくざればあり略云ればなり實
小委しく見らればなり然る小上件^件ニ神の故汝に奈何
と問給へる小尔答白之僕子等ニ神隨白僕之不違此
葦原中國者隨命既献也唯僕住所者云々より即八重
事代主神爲神之御尾前而仕奉者違神者非也と云ふ
で大國主神の答奉り給へる文あり此小如此之
白而と有り其を承^た此小大國主神の仰立らるる如
くしてと云義ありして此より直小其治奉らせ給へ

る天神の御使の方小係れる語ありと如て此とを續
け讀れり故大國主神の如此白^たせ給ふ義小
取成されたりふらめども甚しき僻事あり其補ハ
たり乃隱也の言甚し心得ず其上^{六百二十九丁}小注
るが如く此上文小唯僕住所者云々而治賜者と有て
其任給ふ可き宮を乞奉らせ給ひて其小僕者於百不
足八十垆手隱而侍と申給へるハ其申乞ハせ給へる
宮小鎮り御在り坐べき御事して此小謂ゆる天之御
舎の御事ありければ其天之御舎の成^成後小こりハ
其宮小隱れさせ給へるありければ右の説の如くハ其

言を奉らせ給ひて直小隠れさせ給へる者の如くふ
れども（上六下二）此言を奉らせ給ひて天神の御返言を待奉り
其行ひ下させ給へる大御趣けを待奉らせ給へるふ
りけれ（上六下二）其言を申託させ給ひて直小隠れさせ給ふ
と云事ハ甚有べき御事小ふむ有ける然れハ此を
如此之白而（カクニラレタマヒテ）と訓むと如此之白而（ゴトクニラレタマヒテ）と訓むと小依て大
小義理の別あり所ありと鈴屋大人ハ之を辞と見
られず（上六下二）虚字と爲りれ故小大小説を誇り（上六下二）れたり
者ありけり乃（上六下二）隱也と云時（上六下二）其天日隅宮の出来れり
一坐て後ハ其御靈と奉らせ給ふ料（上六下二）小天之御舎を作
らせ給ふ御事と成りて大小事實を誤る者ありけり

若て水戸神之孫櫛八玉神爲膳夫云々ハ右小謂ゆも
天之御舎の中（上六下二）小大己貴神の鎮まらせ御在り坐けり
時小其御祭仕奉り初させ給へる御事ありて此第
一、一書小天神の大己貴神へ仰下され大御言小又
當主汝祭祀者天穗日命是也と見えたりハ其神の御
子孫として冷祭給ふ由列り（上六下二）小て此時小大神を始て
鎮め奉らせ給ひて諸部神と共小天上小復命させ給
へり（上六下二）あり可（上六下二）し神賀詞ハ八百丹杵築宮（上六下二）静坐是
ハ親神魯伎神魯美乃命宣久汝天穗日命（上六下二）波天皇命
能手長大御世（上六下二）子堅磐（上六下二）常磐（上六下二）伊波比奉伊賀志乃御

世_レ佐伎波開奉_レ登_レ仰賜志次乃隨_レ供齋仕奉_レ朝日
乃豊榮登_レ神乃礼自利臣能礼自登御禱乃神宝献_レ良
登_レ奏_レ有_レ天穗日命の大己貴神を齋鎮めて其礼實
の神宝を擎げて天上に復奏し給ひて次の隨に_レ出雲
臣の仕奉る由あり古事記に天喜比命之子建比良
鳥命此出雲國造云々等之祖と所見たりけり此國
に留坐る其天夷鳥命是始り趣り即崇神天皇
六十年御紀にも武日照命一云武夷鳥從天將來神宝
藏于出雲大神宮と見え_レて其御父の天穗日命を云ざ
る其神は天上に留坐る御在り坐るが故ふ

りけり其天穗日命の后神の御事傳十五丁三
十五三百十丁注るが如く水戸神にして即伊豆能賣
神に渡らせ給へるが其御子の天夷鳥命にして此に
謂ゆる稻背脛命の御事御在り坐り出雲臣譜に依
りて天穗日命其子天夷鳥命其子伊佐我命あり由上七
二十丁阿須伎神社の事因に注るが如く然して其水
戸神の孫と云時右の伊佐我命に當れり櫛八玉
神と其の同神あり可_レ是_レ佗神あり證に次七百
丁に云るが如く燧石燧杵の式に今に傳へて國造の
行ふ式ありを以知られたる但此に天喜比命之孫

と云へき小水戸神之孫の外方を以て傳へたる
ハ水底小潜入り事其水戸神之恩頼ありを以ての
事あり可し其伊佐我命と申せりし伊佐理神と云事
の略して此漁の事を以て天御饗食奉られし功小依れ
るあり心事ハ次七百四櫛ハ玉神の所小合せ説を見
て知へきあり然ルハ此より以下の事共ハ其神の膳
と思へりし甚粗き説して御厨小仕奉らせ給へり事
け見り時ハ天日隅宮にて天上の状を御饗を奉らせ
給へり御事〇如此之白而の説ハ右七百二小己小云
あり者あり〇多藝志之小濱ハ上六百九十九丁小注るが如く杵築郷
の古名あり由ハ記傳小此ハ杵築大社の地の旧名と

聞元たる由小云此つらハ千古の阜見あり先多藝志
の言より明らむ可し履仲天皇御紀小自大坂向倭
至于飛鳥山遇少女於山口問之曰此山有人乎對曰執
事者多満山中宜迴自當麻徑踰之太子於是以為聆少
女言而得免難則歌之曰於明佐箇珥阿布夜鳥等謎鳥
添知度沛麼哆駄珥破能羅孺哆嶮摩知鳥能流三有を
古事記小自當麻岐麻道迴應越幸と見えたり此御
歌小依て考る小直路の迂曲れるを哆嶮摩知
と詠せ給へるが文小當麻徑と有を以て其徑の狭く
且峻しき事知らる常陸風土記小自郡東北十五里當

麻郷古老曰倭武天皇巡行過于此郷略中即幸屋形野之
頓宮車所經之道狹地深淺取惡路之義謂之當麻俗曰
多支と有て此道路の狭く地の深く淺くして謂ゆ
斯凸凹有を以て多支して斯とい云るあり此二を合
せて道の屈曲有と地の凸凹有とを以て當岐麻と云
事知られたり古事記伊弉河宮段不當麻勾君と云姓
有をと思合す可一其日代宮段倭建命り御言小吾心
恒念自空翔行然今吾足不得歩成當藝斯形故号其地
と見えたり當藝斯和名抄舟具小舩唐韻云舩字亦
正舩木也楊氏漢語抄云柁舩尾也或作拖和語云多伊

之今按舟人呼挾抄為舩師是と有り延佳此を引て疑
此物也と云る信小然り略下有如く舩小加遲と云
る物小て古小し然りけむ今も舩小柄を著て持つ
物ありけれ御足り勾れる狀小譬へさせ給へる御
事とこりハ所見させ給へりけれ備此の多藝志之小
濱ハ今の杵築神宮の地ハ本より海岸ありハ御
山の麓まで荒浪り寄る汀渚ハて此ハ常小美祢ハ
云ハ異ハて實小磐石の崎峙立ち巡りてハ小濱
ありつゝむらゝ小然る古名ハ有ハ少て大神の宮ハ
とを建る程の地ハ非りけらハ故小諸の皇神等の神

集い御在り坐て此地を築堅めさせ給へる小依て杵
築とい云り予此小就て其宮小去年も詣て其地
理を見り小東西方より山小挾れて神宮の地其懐小
在て其社地を離れて悉く沙漢漢の地小して今社家
の宅地より杵築の町家の地を係て稲佐浦小至り迄
凡て古ハ海あり所の次第小埋れたり一状ありけ
れハ多藝志之小濱云けむ傍ハ今も猶著明く見元
分れてあり有ける記傳小内山真龍云多藝志之小濱
此村今ハ神門郡鹽屋郷の内ありと有り社説小武志
村小膳夫大明神と申す有て櫛ハ玉命を祀ると云れ
ハ然ハ其ハ此古事記の文と首尾相照し應せて見り時
ハ難し其ハ後小櫛ハ玉神の社と移せむと

△次七百三十三下
云と見合す可し

の事少て後人六百三十三下の所為より可くや○天之御舎ハ上十七下注りか
如く此上文小唯僕住所者如天神御子之天津日繼所
知之登陀流天之御巢巢而於底津石根宮柱布乃斯理於
高天原冰水多迦斯理而治賜者乞奉らせ給へる天
之御巢是より天云云ハ天上の宮造の制小倣いせ
給ひて建させ給へるを以て云小て第二二書小謂ゆる
天日隅宮の御事少て即杵築大社は是より迂却崇神詞
小皇御孫之尊乃天御舎之内仁坐皇神等波云ハ有
る天御舎ハ本より天上の儀式を用ひて造らせ給ふ
が故あり一五十一記傳十四一丁御舎ハ美阿良訶と訓む玉

垣宮段又朝倉宮段小如天皇之御舎と見元祈年祭詞
小皇御孫命能瑞能御舎仕奉兵大殿祭詞小皇御孫之命乃天
命乃美頭乃御舎仕奉兵大殿祭詞小皇御孫之命乃天
之御翳日之御翳止造奉仕流瑞之御殿古語云古語拾
遺小瑞殿古語美豆能之見元檀原大宮造の所小仍令
天命命太玉命率午置帆負彦狹知二神之孫以齋齋
鈕始採山材構立正殿故其喬今在紀伊國名草郡御木
鹿香二郷古語正殿採材齋部所居謂之御木造殿齋部
所居謂之鹿香是其證也有と和名抄小荒賀郷と云
有て御木郷と云見元葉一二十小荒妙乃藤原

我宇信尔食國予賣之賜年登都宮者高所知武等二
小宮柱太布座御在香子高知座而ふと有り名義ハ
在所々又ハ在波訶してハ有べハ波訶ハ何所と波訶
ふと云ふ波訶して隨不其處と定りたり處と云ふ補意
と云北たり今按ふ小在所の説ハ方勝此ハ小や臨時
祭式小鎮御在所祭と有ハ字音して訓べきありめど
も前後と考ふハ小此ハ御殿と鎮る祭りと聞え又中
昔の書共小阿理訶と云事多く見元上六百二十九丁小注セ
る住所ふとの訶ハ凡て人の住著く處と云ふふれハ
此ハ其小准らへて思ふ可き者あり菅家万葉集
小荒金之土

其神の治賜者
御巢を造りて
治奉れり由り
其造宮の事ハ

之下丹手又古今集序小阿良訶（新）の地ハしてハアド
云ハ發語有を記傳ハ細書ハ云く地の枕詞ハ阿良訶
泥能ハ根云ハ舎根あり地ハ舎を立る根ありハ又
津石橋柱ハ宮柱布カス理ハ云ハ思ハ可ハ云ハ殿舎根
勝間橋卷ハ小舎を地ハ枕詞ハ阿良訶ハ常ハ其ハ殿舎根
のハ唯ハ殿舎を美ハ詞ハ阿良訶ハ云ハ知ハ其ハ殿舎根
云ハ伊勢ハ太御神宮ハ如ハ九ハ柱ハ地ハ掘ハ入ハてハ立
舎ハ伊勢ハ太御神宮ハ如ハ九ハ柱ハ地ハ掘ハ入ハてハ立
ハハ良ハ詞ハ地ハ殿舎ハ根ハ由ハ事ハ其ハ發語
ハ傳ハ卷ハ六ハ七ハ續ハ義ハ然ハ有ハ本ハ草ハ和ハ名ハ鐵ハ和ハ名
ハ阿良ハ加ハ祢ハ有ハてハ此ハ鐵ハ沙ハ土ハ分ハ者ハ有ハ故ハ小
云ハ良ハ加ハ祢ハ有ハてハ此ハ鐵ハ沙ハ土ハ分ハ者ハ有ハ故ハ小
思ハゆハ造ハ公ハ上ハ七ハ百ハ注ハろハ如ハ第ハ二ハ一ハ書ハ小ハ即ハ以ハ紀
伊國忌部遠祖手置帆負神定為作笠者彦狹知命神為
作盾者云ハ有ハ此其神等を以て此天日隅宮を以令
作給へりあり其出雲風土記ハ神魂命詔之十足天日

天日栖宮之縦横御量千尋梯繩持而百結二十八結ニ
下而此天御量持而所造天下大神之宮造奉詔而御子
天御鳥命楯部為而天降下之と見えたり是あり諸此
日造ハ其宮を造りて治奉る事を云ふ斯ハ例古書
ハ多キ事ハてハ万葉ニハ十ハ小由縁母無真弓乃齒ル
宮柱太布座御在香字高知座而明言ハ御言不御問日
月之數多成塗之有ハ其二十ハ朝毛吉木上宮字常宮
等高之奉而神隨安定座奴之有ハ如ハ其宮ハ鎮り坐
す事を云ずハ云足ハざハ心ハすハれハども然云ず
して鎮り坐す由ハ通ハゆハハ古文ハの妙ハありハ所ハありハ己

小此也上文小ハ於底津石根宮柱布斗斯理於高天原
冰木多迦斯理而治賜者ト有ハ彼玉垣宮段ハ修理我
宮如天皇之御舎ト有ハ等ト予所アヲを其造ト云事
を云ずトて治賜者ト其祭祀^{鎮奉レ給ハ可キ由}ノ事ヲ申させ給へれど
も自然ハ令造ノ語ヲ含メテ小相等ト予者アヲをや
然ルハ右小引ル上文小ハ造ト云事ヲ略テ祭祀ノ
事ノミヲ宣ヒ此ハ其天之御舎ヲ造らせ給ふト云テ
其鎮奉ノ事ヲ略リ此ハ其天之御舎ヲ造らせ給ふト云テ
理少ク滯ル所無クして甚能通ユル者アリ此を以テ
御舎トハ等ト予事アヲを知ベシ○水戸神ハ同記小
生水戸神名速秋津日子神次妹速秋津比賣神ト有テ
二柱アリ此ハ四神出生章第六ニ書ハ水門神等号

速秋津日命ト有ル也其御袂段アリ伊豆能賣神ハ
一ト正レ其水戸神ハ當ル可キ由記傳及大袂詞後
釋ハ委レテ定説ノ有ラ上小其詞ハ出タルハ荒鹽之
鹽乃ハ百道乃ハ鹽道之鹽乃ハ百會^座須速開都比
咩^止云神持可ニ吞^年有テ夫神ノ事ヲ云さりけル
ハ此ハ女神一柱アリ小違有ラト由傳^{五十}ハ已
小辨ヘタルグ如ク然レテ此神ハ一ト天穗日命ノ后
神ト成らせ御在レ坐けテ由ハ先彼五男神ノ中ハ天
穗日命熊野大隅命ト一神ト爲テ聞ヘレ傳^{十五}ハ三百
ト上^百四^丁小注セテ如ク出雲風土記ハ出雲郡伊努

郷郡家西北八里七十二步國引坐意美豆努命御子赤
衾伊努意保須美比古佐倭氣命之社即坐郷中故云伊
農神龜三年之見元たり意美豆努命ハ即素戔鳴大神
改字伊勢
小坐一赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命ハ天穗日命
小テ渡らせ給へる小神名式を見れば伊努神社同社
神魂伊豆能乃賣神社と見元たり比小テ其后神ハ
水戸神小テ御在ー坐す由を明らり奉る可きあり
亦名を天甕津日命と申して其御ヤ伊努比賣命
亦名神須治曜姬命と申すハ大歳神の后神小テ渡り
世給ふ事委しく傳ハ六卷九十三丁小注るが如し
即天夷鳥命の御兄弟小テ御在ー坐り又此ハ神魂の
言を冠せ奉る比古ハ神魂命の御命以て○孫ハ比古
配せ奉らせ給へる小依れる可き事あり

訓ハ一神名式ハ山城國綴喜郡棚倉孫神社名神大
和國高市郡臣勢山坐石標孫神社吳津孫神社河内國
大縣郡金山孫神社尾張國愛智郡孫若御子神社名神
出雲神賀詞ハ阿遲須伎高孫根乃命と有ふと是孫
字を比古と訓ハ的例あり記傳十四五丁小孫ハ和名
抄ハ尔雅云子之子爲孫和名無万古一云比古と有る
中ハ比古と云孫正ハ孫字古ハ皆然訓り
又曾孫を比古と云比古の子と云義ありハあり
今俗ハ曾孫を比古と云ハ比古の訛れりあり諸孫
を無万古と云ハ馬梅ウメあとを後ハ牟万牟米と云

例して本ハ字万古アリ其ハ蕃息子ウツリコして子等の又子
等の次ハ小蕃息ウツリコの意の称アリ是ハ古き稱ハ聞
えたり由諸此の孫ハ泛ハく子孫の意ハ云ハる可ハし見
ゆ此ハも猶子の子を云ハる可ハし云ハれたる其ハ
右七百二十四丁ハ云ハる如く天徳日命其子天夷鳥
命其子伊佐我命七百三十一丁正ハしく櫛八玉神ハ當ハれりと思ハし
け此ハ子孫を泛ハく云ハふ可ハし非ハず但此をハ天徳日
命之孫ハと云ハべけ此其后神の方ハり孫ハと云ハ事
ハ如何ハあり事ハふが此ハ天御饗を奉ハる料ハの眞魚天平安の塩を
漁ハ海ハ中ハ不入ハる事ハと云ハ件ハありけ此ハ御祖神の御助

小依ハりて給ハふ事ハふが故ハハ其職ハの方ハハ就ハて此ハ水
戸神之孫ハと傳ハへたり者ハあり小ハこハ此孫字を俗ハハ
ハ右の字万古り略ハあり事ハ比ハ古ハと略ハきて比ハ古ハと云ハ
ハ同ハトハり可ハし諸比古比賣ハ對ハへり比ハ古ハの事ハハ別
あり由ハ有ハて傳ハ五卷ハ十ハ丁ハ大戸摩彦尊大戸摩姫尊
の所ハ注ハる如ハくありを孫ハを比ハ古ハと云ハハ經ハ子ハと云ハ小
て子ハを經ハて子ハあり謂ハあり○櫛八玉神記傳十四五十
上ハ三ハ十六ハ丁ハハガハ云ハり○櫛八玉神記傳十四四十
小櫛ハハ奇ハめてハハ弥玉ハ布刀玉命の玉ハと同ハトハくて
手向の約りたるあり可ハし略ハと云ハれ此ハ御饗を奉
る事を手向ハと云ハすハ云ハすハ云ハすハ云ハすハ云ハすハ云ハすハ云ハす
て其膳夫ハとして多米都物を調へて奉り給ふ由あり
可ハし記傳九ハ九ハハ味物ハ多米都母能と訓へし明宮段

小種之珍味と有也如此訓べし其故ハ大嘗祭儀ハ
 奏兩國所献多米都物色目と有て其詞ハ御酒倉代金
 物多米都物雜菓子飯などの色目見え又大多米津酒
 大多米酒波多米御酒多米毎大多米院と見え大嘗祭
 式ハ多米明米多明酒多明酒屋多明料理屋ふども
 見え元ハ此ハ古ハ凡て美味き飲食を云りあり姓
 氏録多米連條ハ成務天皇御世仕奉炊職賜多米連也
 又多米宿祢條ハ成務天皇御世仕奉大炊寮御飯香美
 特賜嘉名と有を以知べし要と見え元ハ是あり予又
 傳十四九十二十九十丁九十注せ此ハ就て見べきあり此

神の膳夫と爲て仕奉り此ハ由を思ふ玉をハ右の
 多米と同く見り外無きを傳十五二十丁二十注り如
 く倭姫命世記皇太神御近幸の所ハ出雲神子出雲建
 子命一名伊勢都彥神一名櫛玉命云々五十鈴川後江
 天奉御饗食と有る後江の其川の水門あるハ櫛玉命と
 櫛ハ玉神とハ弥の意のハの言の添りとのありが
 其御饗食を奉り此ハ所以ハ合せ見ると時ハ其玉も多米
 あり事灼然き者あり
 但櫛玉命ハ神代の神あり
 御近幸ハ皇仁天皇御世ハ
 疑ふ可しと雖ハ杜撰と見え元ハハ今抄ハ事
 此櫛玉命ハ其櫛ハ玉命の子なり又ハ亦名ハ未考ハ得
 ずと雖ハ天夷鳥命の子孫なりハ疑無ハ此ハ古事

を取て其時の事備其伊佐我命櫛八玉神と同神ふ
と成てる小や
りと云上ハ其名義を説ざる事を得ず故右七百三十一丁小
伊佐理長カミあり可しと云るハ次小栲繩之千尋繩打延
為釣海人之口大之尾鱸佐和異、迹控依騰而云こ
有、即其伊佐理を為る事小て此神ハ其漁者の長こ
二云義あり可し此事ハ万葉三十五丁小荒栲藤江之浦
尔鈴守鉤白水即跡香將見旅去吾子之有を一本云白
栲乃藤江能浦尔伊射利為流之見元六十七丁長歌小荒
妙藤井乃浦尔鮪釣等海人船散動塩焼等人曾左波尔
有浦子吉美字倍毛釣者為濱子吉美諾毛塩焼之云句

有て反歌小奥浪辺波安美射去為登藤江乃浦尔船曾
動流十二三十丁小能登海爾釣為海部之射去火之光尔
伊座又思香乃白水即乃釣為燭有射去火之髻鬚妹字
十五十一丁小伊射里須須安麻能等毛之備又十三丁伊射
理為流安麻能字等女波小船乘都良る尔字家里又七十
丁小伊射流火波安可之互登母世又十九丁伊射理里須
流安麻字等女良我十七十八丁小海未通女伊射里多久火
能十九二十丁小鮪衝等海人之燭有伊射里火之二十十二
丁小波麻尔伊泥互海原見礼婆之良奈美乃夜敵字流
我字倍尔安麻字夫祢波良る尔字伎互於保美氣尔都

此書傳三十一卷
三百五十一阿法
流の注云云

加倍麻都流等乎知許知尔伊射里都利家理あど後の
歌おし多く詠し魚釣り網曳きあど凡て海中少て漁
する事を云り儲右の如く同神異ある中伊佐我命
こい其渙する方小因り櫛八玉神こい其漁る魚と
御饗食奉らせ給ふ小因り少て各其職を以て名
ハ成れりあり蜻蛉日記中下小胸の外ハ鷄舟あり
て伊佐理と云物と不為る云くこ云ハ川ありを
然云ふ伊佐理と見ゆ儲鴨長明無名抄小或人云く阿佐理
と云ハ伊佐理と云ハ同事あり是ハ取て朝小為るを
阿佐理と号けく不為るをハ伊佐理と云り此東の海
人の口状あり云く有ハ心得ず夫木集五巻小
朝和の海人の伊佐理と思ひ遣る春の麗々小日ハ成
あけりと詠る朝小膳夫ハ加志波傳と訓あり大
為るを云るあざや

殿祭詞別小皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比礼
懸伴緒襁懸伴緒大袂詞小天皇朝廷尔仕奉留比礼掛
伴男手襁挂伴男と有ハ後小謂ゆ膳夫と采女と小
て上代ハ殊小重職あり一其講義小就て注るが
如く所以て天神御子天津日継所知食す大御世の始
ハ大嘗の大御祭を行ハせ給ひ年毎ハ六月十二
月の神今食マ十一月の新嘗の御神事御在り坐を公
事根源ハ伊勢天照太神を藁請申されて天子御自神
饌を供せさせ給ふハ有ハ如く其二の伴緒を率
させ御在り坐て朝夕の大御饌を進らせ給へる大御

政小御在坐て神饌を奉らせ給へり其祭主と成
て仕奉らせ給ふ所以なり此小櫛八玉神の爲膳夫
と云い其祭主と爲て仕奉り義ありと知べきふ
り其重職あり由ハ景行天皇御紀四十年小天皇西征
の御事時小到的邑而進食是日膳夫等遺蓋故時人号
其念蓋處曰浮羽と有て其供御の器を忘たりを以て
地名こ成程の事ありを以て其重事を知べ
其四十年日本武尊東征の所小亦以七掬脛爲膳夫と
有る此事を古事記小凡此倭建命平國廻行之時久
米直之祖名七拳脛恒爲膳夫以從仕奉也と有て自餘

の侍臣の事を云ざるを見べ其五十三年天皇東國
巡狩の御時小於是膳臣遠祖名般鹿六鴈以浦爲手纏
白蛤爲贈而進之故美六鴈臣之功而賜膳夫伴部と有
る此事小就て高橋氏文小若之膳臣等乃不継在朕王
子等字志佗氏乃人等字相交天波乱良志と云勅命さへ
御在坐是其重任あり故あり非ずヤ記傳十
四五十膳夫加志波傳と訓て書紀小多継体
天皇御卷小供膳膳と訓り和名抄小大膳職於保加
之波天乃豆加佐内膳司字知乃加之波天乃官主膳監
美古乃美夜乃加之波天乃豆加佐と有り名義先甚

上代ハ凡て饌を木葉小盛けり其葉をハ何木不在
此惣て加志波之云リ故饌の事をハ執行ハ人を加志
波傳之云アリ傳ハ手アリ凡て物を造る人を手人
之云ハ今世ハ事を行ハ人を某手之云類多ク出雲
風土記抄ハ神門郡武志村ハ膳夫大明神之有ハ此
神アリ之云リ之見元たり此武志村ハ右七百三十一
注ルガ如ク多藝志之小濱の地ハ非ズ此櫛八玉神と
祀祭此ハ小因て号けたる者アリ可ク又大社志ハ湊
社之申す有リ此ハ櫛八玉神トて大社トシテ神事を執
行ハ社アリカ此をハ今多藝志神社ト申すアリ又湊

△云々事ト次
ル化瀧の所ハ
注ル事ト
互ハ

社之申すハ水戸神之孫トて渡らせ給ハ故ハ其義を
以て称セラル可キハ二ノ記傳追考ハ今世ハ杵築
有リ姓ハ財氏トて別火之云ハ此別火毎年の七月四
日ハ身逃の神事ト云事有リ海底の塩砂を苞ハ身逃
之塩を焼て明日五日の大社の神事ハ献らル身逃
之國造ハ彼別火國造の宅ハ行て此神事を行ハ其日
ハ國造ハ宅を出て他所ハ居ル此を以て云三ノ者大
社の未社ハ湊神社ト云有リ是櫛八玉命を祀ル之云
リ之見元たり此財氏ト云ハ出雲臣の支流アト云
此神事を受継ぎ傳へたり者アリ可キ事上件櫛八
玉神の所ハ○爲ハ記傳十四五ノ小爲字ハ志之訓
考合す可ク○爲ハ記傳十四五ノ小爲字ハ志之訓
ハ此事天照太御神高木神の詔命以て任賜ハ事
ハ此ハありト云此第一書ハ天神の詔命
ハ又當主汝祭祀者天穗日命是也之有を思ハれたる

可くして實小然る言あり然るは右件注るが如く此
櫛八玉神ハ一其天穗日命の孫小く在け此ハ此小
大己貴大神の祭主ニ爲て仕奉るるが其即天神の
詔命小依北ハバあり右小引る崇景行天皇四十年御
紀小天皇則命吉備武彦與大伴武日連令從日本武尊
亦以七掬脛爲膳夫ニ有る亦字ハ上あり命字ニ令從
この字を受たり少て天白皇の大命を以て七掬脛を膳
夫ニ爲て令從給へる小て此の爲字ニ同トク又應神
天皇二十二年御紀小天皇吉備國小行幸て葦守宮小
御在り坐す所小時御友別參赴之則以其兄弟子孫爲

爲膳夫而奉饗焉ニ有る其御友別ト兄弟子孫を
て膳夫小仕奉り一むる所あり故小志込ト訓らふ
リ又記傳小云く那理互ニ訓む時ハ櫛八玉神の自爲
ハ天神ト成れバ其義小非す云此ハ如く小て此
給へる所あり令行 ○天御饗ハ此文小如此之白而造
天之御舍而ニ有る引合せて讀へし然るハ天神の詔
命を以て天神御子の天津日繼所知食す天之御舍の
如くして鎮め奉らせ給ひ此トハ天神御子の方よ
り令祭給へるありけ此ハ此ハ天上の儀を以て仕
奉らるる事ありを以て天御饗ト云る小て下小謂
ゆる天之眞の魚咋の天字ト此小同ト大嘗祭詞小天

津御食乃長御食能遠御食登中臣壽詞小天都御膳遠
 長御膳乃遠御膳止見元此第三一書小天甜酒之有
 り類是あり右等の文を引て記傳十四五十五小天字ハ
 天上少て行ふ御饗の式を用り故小云あり可
 備此小献天御饗之時と云ハ惣てを括りて先言置て
 次小其細あり件とをバ云あり是文ハ一格玉して中
 昔の物語書ふども多し次小禱白而と云あり献天
 之真魚昨也と云あり即此御饗の件とありと云ハ此
 りが如く此ハ大網の文次ハ小目の文あり者あり其
 御饗の事小就て傳十九卷四十二下小云る如く新嘗
 小庭饗と云ふ一の義あり又雄略天皇二年御紀小欲

△造るるとい意
 表すの事なる
 大神の爲に奉
 るが故に其事と
 係り禱言せる
 者なり

與群臣割解野饗之所見て野饗と云語有る依て天御
 饗と天之御舎の御饗あり小就て天字を冠せたる
 りと思ひしと云其ハ
 甚粗き説めて有けり○禱白而ハ大己貴大神ハ
 其天日隅宮小鎮らせ御在り坐て幽々顯々世ハ己
 小相分れたりければ其神宮小仕奉りて願辭爲るふ
 り斯して其禱給ふハ何事ぞと云小次小謂ゆる天平
 竈造る料の埴を御饗に取て天に御饗を奉る白燧を御饗に取て天に御饗を奉る杵の料物を御饗に取て天に御饗を奉るを海底小取て献
 る可き由を願奉れり小て大神の爲小齋まハりの心
 を盡し究めさせ給ふ義あり此をバ唯小櫛八玉神
 の化鴉入海屋の事其次を燈杵を願る一事ハの係り見る可きあり祝詞考
 小此の文を引て云く此ハ甚々上代ハ大社小祢申

す文ありと云北記傳十四五十一小禱白六十一石屋戸段小
天兒屋命布刀詔例戸言禱白而之有と同ト事少御
饗奉る祝詞ありと云北一いをいしと聞ゆり事あか
ら此一水中不入へき由の願言一して此下小鑽出火
云と云一其天御饗食を料理へて大神小遠一長
如此一くして仕奉る可き由を誓ひ申せる詞一少て常小
云ふ祝詞の例とい大小趣の異ありける事共あり此
願禱白而と云義傳十九百五十小己小注せりき又
傳小此禱白す詞一下文は是我所燧火者云と有る
是あり然る小禱白と云事を彼處小云すして此小先
云る御饗献る時と云小接連む為あり云と云此
い然る言ふが此禱白而之下小云と云るとい

分たれざりし事能し ○櫛八玉神記傳十四五十一小此小
再此名を擧る上詔命して任賜ふを云ひ此
其任を奉りて是より下の種々の事を此神の行ふ
由小云ふと有か如く ○化鷄一本草和名小鷄一鷄一仁
盧茲一一名蜀水華一一名鷄一出兼和名字と有か如く御紀
二音一多一鷄一の字を用ひられたる万葉三三十一小阿
倍乃島字乃住石六六十一小島回為流水鳥二四毛有
哉三十一小上瀬尔鷄兵八頭漬下瀬尔鷄兵八頭漬
十七三十一小宇奈比河波伎欲吉勢其等尔字加波多知
又九十一夜菴登毛乃波字加波多知家里十九三十一潛鷄

歌小島津鳥鷓養母奈倍又在伎多河鷓小頭可頭氣
鳥又^ニ一^丁贈水鳥歌小卑湍生波水鳥半潜都追又和我
勢故波宇河波多^{和名抄}佐祢又鷓河立取左牟安田能ふど
見の記傳十四^{五十一}小鷓鷓^{和名抄}辨色立成云大云鷓鷓^{日本}
記云志万^{三丁}小鷓鷓^{俗云}尔雅注云鷓鷓水鳥也皆頭如
豆止利^利小鷓鷓^{俗云}尔雅注云鷓鷓水鳥也皆頭如
鉤好食魚者也と有り志万豆止利と字とを大小小分
たり非^ハあり庭津鳥鷓野津鳥雉と云格して島津鳥
鷓と云ハ一あり又字を俗云と云ると如何不や字て
ふ^{名已}白檮原宮段大御歌小志麻都登理字加比賀
登母と見元たるを也略之云此たり^{右の水鳥を一}
本小水鳥と有

を右の尔雅注小依^三時ハ水鳥ありと雖^ハ其鳥可似
た^ハを以て此方^ハ水鳥の二字を合せて字と訓
せたりあり可^ハ字鏡小鷓鷓^{即都反鷓}字と見元鷓才
資及字と見元たり琅邪代醉篇小鳥鬼と云る者あり
○化ハ那理氏あり凡て神の御上ハ甚奇異あり者不
て其爲行ひ給ふ事の状小依てハ物小形を變化^ハて
其物其事を易^ハ成^ハ給ふ者あり其二を云ハハ神
武天皇戊午年御紀の頭八咫鳥の御事を姓氏録^{山城}
別天^{小鴨縣主}略神日本磐余彦天皇^{證神}欲向中洲之^{國神}
時山中嶮絶跋涉失路於是神魂命孫鴨建津身命化^如
大鳥^鳥翔飛奉導遂達^{中洲}略^下有^ハ空^ハ翔りて導奉^ハ
小非^ハずして其路を求めさせ難^ハ故小大鳥^鳥と化

しせ給へるあり又出雲風土記小島根郡法吉御略神
魂命御子宇武賀比賣命法吉鳥化而飛度静坐此處
云注^法吉と有り古事記八十神段大穴年遲神の所殺給
ひし時小蛤貝と化て其^母乳汁を^塗以て作法し給へり
しを又此飛去て地を易給ふ小法吉鳥と作て飛度
りせ給へるふ各其物の形と化て物爲給はずして
ハ事の濟ひ難き所以有りけ此ハふり記傳十四五
六小櫛八玉神の今此鳥化此ハ勝北て水底ハ善
潜入る者あり故ありと云此ハ如く浪を分入て
海底小物爲^可は事有^可ハ鶉化て物爲る時ハ便理宜

しきか故小其海底ハ潜入らせ給へる間假小其鶉の
形ハ化給へる少て右小禱白而て有る事の驗有る
由と此小記されたり右七百三十四丁小注るが如く
此神ハ一々天穗日命と水戸神マニ柱神の孫ありけ
れハ出雲國造の祖あり然して崇神天皇六十年御紀
小鷓濡淳マ云人の所見たるハ同録^{右京神別}出雲臣
天穗日命十二世孫鷓濡淳命之後也と有る^其此名も此
小由有り此時ふどい己小人世あり然る化鷓と云
事ころハ出來ざり然れども祖業を傳へて海底の
埴を取て平瓮を造り大神を祀りけむり負る名

小て鷄ウツク如カクの義ありむと思ゆ然然此此右右七百四十
 氏氏の職職元來出雲國造の家小傳傳たり業あり財財
 氏氏の別別程程其家小限る職職成成此此り事決
 事事あり此と以て財財氏氏愈出雲出雲○海底海底和和多多能能曾
 國造の支流支流事事を明明らむ可可く
 許許あり此小經緯經緯の差有て經經と水水底底と云云り緯緯と
 八八澳澳と云云小て海退海退の義義あり事傳傳十十四四百百小注注せるケ
 如如く○入入小潛入潛入事事あり右小引引崇神天皇六十年
 御紀の鷄鷄濡濡淳淳命命更更あり万葉万葉カカ十三十三十十小上上瀬
 小鷄鷄兵兵八頭八頭瀆瀆下下瀬瀬小鷄鷄兵兵八頭八頭瀆瀆十九十九丁丁二二小左左伎伎多
 河河鷄鷄八頭八頭可可頭頭氣氣又又二十二十早早湍湍小波波水水鳥鳥字字潛潛都都追追ふ
 と有有り鷄鷄小潛潛くと云云水水小入入事事あり此も其其心

万葉十九丁三小
 藤奈美能影成
 海之底清美之
 都久石子毛珠
 等曾吾見流
 又多枯乃浦能
 底左信尔保布
 藤奈美字云

小見べきあり○底之記傳十四五五十十小上上小己己小海
 底底と云云て又又如此如此云云海海底底と云云唯唯海水海水の下方下方と大
 凡凡小云云言言此此底底正正しく底底と云云ありと有有が如如く古今
 春下小吉野岸山吹吹吹く風風小底底の影影さへ移移るひ
 小けり同戀ニ小冬池小住む鳩鳩の列列も無無く底底不通不
 と人小知らるるふ後撰哀傷小亡人の影影た小見見えぬ遣
 水水の底底小涙涙を流流して来来源源白白若若紫紫七七小何何心心有有て
 海海の底底小で思思入入らむ底底の見見目目も憤憤りらああと宣宣ひ
 て云云ふと其其余余カカ小舉舉ら小違違非非ず凡て底底と云云物
 云云事事あり夫夫木木集集十四十四小菴菴雲雲居居の何と云云て壁壁の
 底底より色色合合すらむ又脚脚室室山山麓麓の尾尾花花霜霜枯枯て

嵐の底少弱ら虫の音十ハ小凍かまに現とも無き心
 ちりて老の底より年が暮ぬらふと壁底と云ひ嵐底
 と云ひ夢底と云ふおど皆右の意あり今物語廿六ハ
 近來和哥の道殊小持成さしり内裏仙洞攝政家
 何れも取小底を極めせ給へり云々○波逆ハ
 云ひ其勢の至る極めを盡すを云ふあり
 埴あり傳九三十一十五十六埴山姫神の下ハ注るが如く
 記傳十四五十七和名抄ハ埴釋名云土黃細密曰埴和
 名波尔字鏡ハ埴黏土也波尔と有り万葉ハ一二十
 小岸之埴布尔仁宝播散麻思乎六十五小住吉能岸乃
 黄土粉又一三十住吉之岸乃黄土七三十七小山跡之宇陀
 之真赤土あども作り埴ふる地を埴生と云り此土ハ
 陶器類を作る土あり補意云れたり小下明らけり
下略

△其下ハ天皇以前
 年秋ハ月曆取
 天香山之埴土以
 造ハ十平宮一册
 自齋戒祭諸神
 逆得安定區字
 故号取土之處曰
 埴安見えたり
 是なり

若て此ハ海底の埴を取出給へるハ其天ハ十毘羅羅訶
 ハハ大神小奉り天御饗を盛る科ありけれハ殊ハ
 人あどの踏荒さる清土を用ひさせ給ハむとある
 小こり神武天皇戊午年御紀ハ夢有天神訓之日宜取
 天香山社中土以造天平笮八十枚并造巖笮而敬祭天
 神地祇亦為嚴咒詛云ハ御訓の御在り坐けりハ依
 て椎根津彦ハ弟猾とを遣して其土を令取給ハ其土
 物を令造て天神地祇を祭らせ御在り坐けりハ果
 て其驗の御在り坐けりを以て此物ハ造る埴をハ古
 ハ甚しき物ハ為させ給へる御事を知べハ又倭姫命

△昨出鴉の魚と
 昨如く小海
 日填と昨持と
 給へるなり若
 此一事の二鴉
 化て物為給へ
 業子此より下
 其本の身より
 復と給ひての
 所為なり能此
 界と誤り可非

世記おも又隨天神之訓土師物忌定置取字仁之波
 迹造天平篋八十枚天敬繁諸宿宮も有り如此く右の
 海底の填と取給へる所を指示させ給へるを以て此大神の御心ハて彼禱白而
 由と見奉り知べきあり○天八十毘良迦の天ハ天上
 の御物不擬へるを云ひ八十ハ物數の多きを云事
 例の如く毘良迦ハ記傳十四五丁ハ神武天皇戊午年
 御紀造天平篋八十枚の下小平篋此云毗羅介ハ注
 此又次ハ乃以此填造作八十年平篋天平扶八十枚嚴篋
 而陟于丹生川上用祭夫神地祇見之水垣宮段ハ又
 仰伊迦賀色許男命作天之八十毘羅訶定奉天神地祇

之社之所見ナリ和名抄瓦器類ハ盆唐韻云盆瓦器也
 尔雅云盆謂之孟兼名苑云盆一名孟孟辨色立成云盆比
 良加俗云保止岐と有り盆之篋ハ同字ハ下今云不
 皿鉢の類あり者あり俗ハ云ふ盆ハ非ず字鏡ハ
 魅又鏡鏡を比良加と有り魅ハ字書ハ見えず又鏡ハ釜
 の類と聞ゆルハ比良加ハ如何備此器ハ今の皿又
 土器ふとの如くあり物と聞えたり儀式ハ徑一尺三
 寸深一尺四寸と見え大嘗祭式ハ比良加一百口各受
 一斗ふとくも有ルハ大ありも有あり可一各義比良
 ハ書紀小平篋と書ル如く深く平あり形を云ふ

ハ土器也
先通音
ハ本ニ
ハ本ニ

式小多加須伎比良須伎と云ふ器と見え又今世の膳
具ハ比良有リ都煩有リ是等形小因此ノ名有リ^サ又
皿ふど云々^イ浅在の義あり可^イ顯宗天皇御卷ハ浅
甕^ゲハ有リ俗言小器の浅きを佐良伎と云ふ^カ迦ハ此類
の器の惣名と聞えて由加又多志良加又疑ふ^カ有リ
大嘗祭式小丸應供神御雜卷者神語曰由加物と見え
又由加十口ふどし見ゆ^カ志^カ意^カの意あり可^イ又太神宮
儀式帳ハ天平^カ尾十二口ふと見ゆ今用ふる比良迦俗
ハ盆^ホ尾^ゴと云て形ハ丸き盆の如く徑ハ寸許深一寸許
して尋常の土器の如き焼ふる物して毎節字述郷

ハ土器也
先通音
ハ本ニ
ハ本ニ

の貞すとあり^取意と有して心得べし^又云々^{記傳}小大同
記曰米女忍比賣我作之天^元年太神^カ宮^カ本
仕奉支^カ方^カ案^カ之^カ平^カ賀^カ者^カ盛^カ供^カ神^カ物^カ之^カ土^カ器^カ也^カ今^カ世^カ伊^カ勢^カ
太神宮御殿下多以安置之或説諸神參候之神座云々
云^カリ^カ諸^カ神^カ參^カ候^カ之^カ座^カと云ハ^カ得^カゆ^カ事^カあり^カ後^カの^カ附^カ會^カふ
可^カ一^カ百^カ練^カ抄^カハ^カ保^カ安^カ二^カ年^カ九^カ月^カ六^カ日^カ諸^カ御^カ定^カ申^カ豊^カ受^カ太
神宮為洪水流損事正殿下天平賀流損事と見えたり
云々
北^カき^カ○^カ作^カハ^カ其^カ土^カ器^カを^カ造^カら^カせ^カる^カ事^カ小^カて^カ此^カト^カり^カ以
下ハ^カ櫛^カハ^カ玉^カ神^カの^カ本^カ身^カ小^カ成^カ給^カひ^カて^カの^カ所^カ作^カあり^カ○^カ海^カ布
ハ^カ記^カ傳^カ十^カ四^カ五^カ十^カ小^カ米^カと^カ訓^カべ^カ一^カ米^カハ^カ海^カ藻^カ滑^カ海^カ藻^カ昆^カ布^カ
ふどの類の惣名あり和名抄小海藻和名迹木米俗用
和布滑海藻阿良^カ女^カ俗^カ用^カ荒^カ布^カと^カ見^カ元^カ万^カ葉^カ十^カ四^カ三^カ十^カ
小比多我多能伊蘇乃和可米乃十六^カ七^カ丁^カ小^カ角^カ島^カ之^カ迫^カ

門乃推海藻者人之共荒有之可杼吾共者和海藻之有
此一首の歌小如此字を替て書此ハ和海藻の方ハ
逆岐米と訓べきり備和名抄小ハ和布と荒布とを出
して和若布と云をバ出さず又名の一の如く思ハ
此ハ延喜式小海藻推海藻滑海藻又和布海藻荒布
と三を並べて擧たり所ハ有此ハ別あり備此小海布
と聞ゆ此ハ唯小米と訓へて何此の米とも難定ま
中ハ推海藻滑海藻との米小海藻の字を當又万葉
七下小海藻列舟海人榜出良之と書此ハ海藻ハ米
の惣名あり小此字を又尔岐米小用ひたるを思へハ

種ハの米の中ハ逆岐米を主と爲る小ハ取小云此た
り石件和布荒布と云て一種の名あり小式小和布を
訓たるハ若布とて別ハ一種あり小ハ非ず其和布の
若き芽を採取て用ふる事あり故小字も同トきを用
ふるあり草木の稚きを若草若木と云小異あり
ず備出雲風土記を見る小北海の島ハ小生海藻又ハ
生紫菜海藻と云て荒布の事一所も見えさりけ此ハ
此海布ハ云れたる如く小和布の見て大小味有る事
次小云不燧白の條小考合す可ハ万葉三卷二十丁小
塩焼云く有る軍布を米と訓るハ和名抄小昆布和
名比呂米一名衣須須女と有る其昆字通ハして軍

万葉十七丁下之
良奈美能傳
比木母之有白浪
の寄來るる言
節問と云事
十九丁下八
摩珠藻乃
も有同
凡て藻の類
並有て其の如
節有る若

字を用ひたる小や然れども昆布ハ蕪布と云て其
海小絶て無き者ありけれハ其字を用ひたるのこ
小て猶和布の柄ハ道祥本小此ありと加良次あり
方あり可
を久伎之訓なり記傳十四丁六十小和名抄小大枝曰幹
和名加良之有る是あり韓幹字注小艸木莖也之有り柄
字ハ茅の類又斧あどの柄の事小て意異ふれども其
を同トく加良之云故不通ハて書るあり物の柄を
云も草木の莖を云も加良てふ名ハ一あり可く漢國
小ても木枝の大ありをも云ひ又斧柄をも云て通へ
る事有り」と注され又其十九丁六十小多能伊那賀良迹ハ
田之稻幹小あり神代紀小粟莖字鏡小釋杆桿阿波加

良と見えて説文小稗木莖也と云り万葉十一丁三十小
吾屋戸之穂莖古幹採生之實生左右与君字志將待と
見え字書小草木莖曰幹と云り九丁と云れたり又伊勢物
語三十小古の句ハ何ハ櫻花扱け幹とも成少け
哉と見四備此ハ海藻の幹あり所を云り記傳小
土記小お雲郡腦島の産物小藻柄と云物有り此ハ何
物小リと云れ然れども今在る本ハ腦島と有る
細書小生紫菜海藻有松柏と云ハ字
有るのこあり別本あり○鎌ハ道祥本小
ハ鎌小作り記傳十四丁六十小鎌ハ加理氏と訓べ
芥あり鎌字小芥多意ハ無れとも体名を其用小用ひ
たり事夫若日子段小帚小掃字を書る是用を以て其体

小用ひたりと相似たりと云れたりが如く万葉一五
丁小射等籠荷四間乃珠藻乃麻須ニ^{十二}小住吉乃淺
香乃浦尔玉藻乃手名と有ふど玉藻乃海藻乃^川
と云事常小多し○海尊ハ道祥本小海葦と作り其
事ハ次ハ云べし本草和名小石純^{常論反性一名海}
尊^{出崔}和名古毛と有り記傳十四^{三十一}小和名抄海菜
類小石純唐韻云純水葵也漢語抄云石純古毛一云水
葵^菜藻辨色立成云海尊和名上同と見ゆ此石純と海尊
と一物ありて海小生る物と見ゆ水草の菰とい別あり
字書と考る小純ハ尊と同一くして本草ハ尊一名水

葵と有り海草小非ず池澤ふど小生る物あり然れハ
純と石純と別ありを和名抄小一ありて唐韻と打
たりハ誤り又漢語抄小石純の一名を水葵菜と云
と違へり大嘗祭式小紀伊國所獻云く都志毛古毛谷
六籠令賀多潛女十人量程採備と有る古毛も是あり
可く谷川氏云く海草小古毛と云物有り小藻の意
可く穗俵小似て丸き物多く著り云り取と云れ
る諸道祥本小以海葦之柄と作て海葦と阿斯と訓り
燧杵小作る小ハ然滑らり小して嫩き海藻の方あり
ハ草の葦ハ莖と詳り小在る物小ハ在けれハ此方を

不似たりと雖も凡て此時の事共ハ櫛ハ玉神の禱白
 給へる不應へて神異の始て見しれさせ給ふ所不
 在けり常ハ燧曰燧杵ふどの如きハ火ハ縁有
 る檜木を以て物為る事あり不此ハ水底ハ在て火
 ハ更ハ由無きハ上ハ然も其海菜の中少ても殊ハ嫩
 弱あり和布を以て曰不作り又滑在りある海尊を以
 て杵ハ作りしめて如何して今日ハ道理の上ハ
 てハ成来し事難キ中ノ難キ物為る事右ノ禱白されハ驗と
 ハ云ふが大神ハ仕奉るる所為の厚き事を如此
 く示し奉りし者と見えたる此ハ尋常ありハ賢くヨ
 凡人等の得しハ信用く

大い事ありしめて奇しき事と云知ぬ深き味
 といひ有る所あり者あり借水菜の尊いし本ハ滑
 といひ為て軟らりあり物ありを此の海尊も其如く
 て滑らりありて手ハ採り難き程の物ありあり
 ○柄を此めてハ道祥本ハ久伎ハ訓りハ海尊を海尊
 不作りハ不隨へるありめども右七百五十四丁ハ注る如く
 幹ハ莖ハ同ハ物あり和名杖木具ハ莖玉篇云莖戸
 反和名杖之主也と有る是あり○燧曰ハ記傳ハ肥伎
 久木 理字須ハ訓れたる大嘗祭儀悠紀主基行列の中ハ次
 木燧一荷納白菅ニ合吳竹爲臺覆以緑纈纈結以木綿
 一人以布網維之其上挿賢木擔丁一人部領左右
 相夾と有る此木燧を肥伎理ハ訓り大嘗祭式ハ火
 燧ハ作りしめて其訓同ト事あり靈異記中ニ丁ハ信

燧鑽東春熟火炬西秋と有て燧を比岐利備辛と訓
鑽を岐里又母ニと所見たりも是して上古ハ並て用
ひたり者見ゆ然して玉葉ハ神宮之習不用火打
用火切と有て後ハ僅ハ神宮あどハ残るの事あり
ハ見えたり此を曰と云ハ記傳十四三十一ハ火切を
以て碾り揉む状物を舂ウハ似たる故ハ曰杵と云
るあり可一今ハ太神宮忌火屋殿ウて神供を炊く火
ハ皆切火あり其法ハ能枯たハ檜の木口を切り其中
口の中央ハ少ハ凹ニを付て又錐の柄の如くあり木
を以て刀を入れて彼木口を強く揉て火を出すあり

右の木ハ檜少てハ又ハ山檜葉と云木おても作りと
ありと所見たり又云燧字注ハ取火具也と云ハ礼
記内則篇ハ左佩金燧右佩木燧注ハ
燧取火於日木燧鑽火也と云ハ木燧ハ打
出す可一由無ハ是ハ火切あり事明ハけハ云ハ
諸右の儀式ハ木燧と有ハ宜ハきハ式ハ火燧と作
る其木字を誤れハあり其何波國献物ハ中ハ火
鑽三枚又ハ神服を織る所ハ具ハ火鑽三枚已上料
鐵ニ延と見えたり其ハ火打ハ木燧とハ別あり可
○燧杵ハ記傳十四三十一ハ肥伎里疑泥と訓ハ和
名抄ハ曰ハ須舂穀器也杵ハ舂槌也と有ハ和名抄ハ
火鑽和名比岐利燧和名比宇知と有ハ凡て火を出す
ハ打と切との異有ハ日代宮倭建命段ハ以其火打而
打出火と有ハ是打火ハ尋常の如ハ又上代ハ忌

て清く為る火ハ皆鑽出す事して火打を以用ひず火
切を用ふ今小至るまで太神宮の御饌炊く火おどハ
然あり故小伊勢國にてハ必し切出さねども別小
忌清めたる火をハ切火と云あり借伎留と云ハ輾磨
ろと本同言あり可く俗ハ毛美火と云り靈異記ハ
鑽岐里又母三と有れハ古より毛牟と云ハあり錐ハ
て穴を穿を俗ハ伎理毛美と云ハ錐と云ハ伎留具
あり故ハ其伎留を毛牟と云り此も同言あり借右
の和名抄又崇神天皇御紀日本武尊段ハ以燧出火
有あど小依れハ燧ハ火打あり小此の燧曰燧杵の燧

を肥伎理と訓ハ如何と思ふ人も有べけれど燧ハ火
打ハ火切ハ通ハ用ふ可き字あり和名抄ハ鑽
を比岐利燧を比字知分たりハ漸後の事あり借火
を切出す法ハ先鑽字を所以穿也と云穿器也と注
せると錐字の注ハ穿器之鋭者似鑽而小と云を合
せて思ふハ漢國にてハ鑽ハ錐の如くハ鋭らねど
し穴を穿る器の名あり然るハ鑽燧と云事古き漢籍
ハ見えたれば火を取ハ彼鑽と云器ハ似たる物を
以て穴を穿る如くハ碾り揉て出せしと見えたり謂
ゆハ燧是あり必し金ハ限らず木ありも有り木燧

是あり今此小燈曰燧杵之有と其不思合す此ハ御國
 小ても火を切ハ然為事知ら此たり採と云此
 右小引る儀式の木燧ハ曰ハ杵ハ渡る名ハ有
 此ども鑽字ハ岐里と母ニと訓を思ハ專此燧
 杵ハ能當れる字あて有ける軍防令ハ凡兵士云
 皆令自備と見えたり右の和名抄ハ謂ゆる火鑽
 和名此岐利と有る物云々實ハ後の火打の事と見
 元燧杵ハ何れハ通ハ云りて見えて我上古小燧
 曰燧杵と云ハ如くハ委ハく分て云さり者と見え
 たり右件ハ次ハ鑽出火の注ありしと此の二
 事ハ取て注セリハ次ハ其器の事と辨へすて
 有べけれハ鑽出火ハ記傳十四一丁ハ肥衰伎理伊傳
 氏訓ハ倭姫命世記ハ此問給久汝等我阿佐留物

者奈尔曾^止問給^支答白^久皇太神之御贄之坏奉^止伎
 佐宇阿佐留^止白^支于時白事恐^止詔而其伎佐宇天令
 進太神御贄而佐^宇乃木枝^宇割取而生比伎^尔宇氣
 比伎良世給時^尔其火伎理出而采女忍比賣^戎作之天
 平賀八十枚持而伊波比^尔仕奉^支と見え元高橋氏文
 磐鹿六猶命の膳夫と為て仕奉給ふ所ハ是時上総國
 安房大神^宇御食都神^止坐奉^天若湯坐連等始祖意富
 賣布連之子豊日連^宇令火鑽^天此^宇忌火^止為^天伊波
 比由麻閉^天供御食并大八洲^尔像^天八字止古八字止
 咩定^天神齋大嘗等供奉始^支但云安房大神為御食津
 神者今大膳職登神也今令

鑽忌火大伴造者物部豊日連之後也部有リ大嘗祭儀又式小伴造鑽
 火兼炊御飯安曇宿禰吹火と部有ハ右の例小依ハ
 者有リ取之有ガ如ク此ハ櫛ハ玉神已小天八十毘良
 迦成就部ヒテ御贄の物共を仕奉らる一為小火を鑽出
 給へる有リ又云ク内山眞龍ハ出雲風土記の考小神
 玉神の事と云フ御屋部比多伎山ハ雞火焼山部ハ櫛ハ
 有リ今考部同記小宇比多伎山郡家東南五里五
 十六歩大神之御屋也部有ハ朝山郡家東南五里五
 十六歩神魂命御子眞玉著玉之邑日女命坐之亦時所
 造天下大神大穴持命娶給而每朝神通坐故云朝山部有
 同ト地部御屋部謂部其部不部云部可部且櫛ハ玉神
 此ハ雞部化部給部へ部火部を部燒部給部ハ又其追考小云ク出雲國造義
 此云ハ心得部火を燒給ハ又其追考小云ク出雲國造義

孝弘安記小自天照太神至意宇足奴命神相継十八
 代也第十九代宮向宿禰之時自賜出雲姓以來至義孝
 子相承廿八代也雖然鑽神火飲神水未混流俗部有
 由大社の説あり自天照太神と云ハ心得ず此ハ
 自天穗日命と有ベキ事アリ國造代ハ神火相續とて
 第一の大事とす今世不至る迄ハ國造新ハ世を継む
 と為る時ハ先意宇郡あり大庭社部行テ神火神水と
 受継部式有リ其ハ神代の火切白火切杵と云テ天照
 太神より天穗日命小授給部ハ部國造家小代ハ第
 一の神宝と為テ傳來る宝物有を始大庭社部行ク時

此を袋あがけ自頸懸て持行き此火切臼火切杵を以て神火を継ぐ此を火継と云り然る故に國造の世替りを火継と云あり諸火継竟りて國造と成ぬ此食膳を調ゆる事も常小此神火を用ひて其を慎む事甚く嚴重にして假ふも佗火を用ふる事無し諸又正月元日小火祭と云て彼神代の火切臼火切杵と云を祭る所為有り又毎年十一月中卯日小國造彼大庭社小行て新嘗會と云事有りて國造初て新穀を食はる此時ハ熊野社より火切板火切杵を彼社人持來りて火を鑽出て饌を調へて國造小奉る式有り其熊野

の社人の持來る火切板ハ長三尺許廣五六寸厚一寸許あり檜の板あり火切杵ハ長二尺五六寸許あり細き空木の丸木にて是ハ板杵共小毎年小新小作此物にて此を以て火を揉出すあり諸又此神水と云ハ意宇郡山代村小天真名井と云有り式あり真名井神社是あり彼大庭社より十四五町東北の方小在り國造新嘗の時小此井水を用ふる事と云と見えたり此小其火切臼火切杵を天照太神より天穗日命小授給ひしと云事心得ず抑檜ハ上章第五一書小見えたり如く素戔嗚尊の御胸(毛)毛より化出たり者小上天の木小非ず且燧臼燧杵の事ハ櫛八玉神の始と物為給小時異あり所由の有て海藻と以て造給ひしと其ハ其時限の事ありて其より以後ハ檜を以て

常用不充_レ此_レ物_ノ有_レけむ_レ神
代_ノより傳_レり來_レて宝_ニ成_レれり_也神
斯_レ亦_レ良久_ニ之_レ訓_レれたり_此より以下_ハ其_レ奉_ル可_キ天_ノ御
饗_ニを料理_スる_不就_テの_レ称_レ辭_スり_其ハ自_レ他_ノの差_ハ有
此_レが_レ高_橋氏_文不_レ般_鹿六_獵命_ノ大_御食_不仕_奉ら_る
事_ヲ所_レ聞_食て_即歡_給此_レ譽_賜天_ノ勅_久此_者般_鹿六_獵
命_獨我_心波_非矣_斯天_坐神_乃行_賜倍_物也_大倭_國者_以
行_事負_名國_奈般_鹿六_獵命_波朕_我王_子等_亦阿_礼子_孫
乃_八十_連属_尔遠_久長_久天_皇我_天津_御食_子齋_忌取_持
天_仕奉_止負_賜天_云山_野海_河者_多尔_久乃_佐和_多
流_岐波_加弊_良乃_加用_布美_岐波_波多_乃廣_物波_多乃_狹物
美

波_多乃_狹物_毛乃_荒物_毛乃_和物_供御_雜物_等兼_攝取_持
天_仕奉_止依_賜如_此依_賜事_波朕_我獨_心耳_非矣_是天_坐
神_乃命_叙云_レ慎_勤仕_奉止_仰賜_誓賜_天依_賜岐_有る
此_ハ其_大御_饗聞_食させ_給ふ_方より_称辭_為させ_給へ
る_を此_ハ其_天御_饗之_聞食_する_此方_{より}称_辭を_奉る
あり_者より_其意_味同_ト事_{あり}右_不斯_天坐_神乃_行
賜_信物_也又_ハ是_天坐_神乃_命叙_有る_類此_不於_高
天_原者_神產_巢日_御祖_命之_云レ_云不_其称_予狀_ノ
相_通へ_るを_も見_る可_き者_{あり}斯_レ例_ハ歌_ハ多_ク
有_る事_少て_万葉_{十九}
新_嘗會_肆宴_應詔_歌何_レ

と社辞あり中も天地與久方也尔方代尔都可信麻
都良半黒酒白酒字と有るどい殊小此の状不相似た
物記傳十四卷五十六丁小禱の而有言と此云字の下文小是我所燧
右飛而四十丁下小注るが如く此時小禱のさし其ハ
鶉ハ化て海魚ハ入り其塩を咋出て天平雀小作料
小為心事と海布海尊と以て燧印燧棒と為して其ハ
リ火を取て天所響の忌火ハ同ハむ事とを願ハされ
係ハて此迄ハハ○是我所燧火者ハ上小鑽出火と云
丁己小燧ハ火小就て社辞為給ハる右十一丁小
注るが如く上小作天六十畏良と云ハ大ハ火ハり小云
多者ハして此ハ今也見小嚴殿ハ其ハ中ハ不在て作ハ
也ハりあり然ハ方ハ此火と鑽出給へる事を云ハ右ハ也

引る高橋日文小豊日連連字今火鑽天此ハ心火止ハ為天
伊波比由麻閑天供御食ハ見ハ元大嘗祭儀小造酒童女
先春御飯福云春畢伴造鑽火授安高宮宿祓吹火伴造
炊御飯内膳司率諸氏伴造各供其職料理御膳と有ハか
如く火を鑽ハて云ハ其天御饗ハ奉る物と煮炊く為ハ不
るが其ハ云ハずして天之新葉之凝烟之ハ拳童摩豆
燒舉地下者於底津石根燒凝而ハ申給へる古文の
奇ハく妙ハる所あり己小神賀詞小伊豆能眞屋ハ鹿
草ハ伊豆能能席登ハ敷天伊都閑黒登ハと有る國造の
神事ハ久ハく忌籠る事と伊都閑黒登ハ之の一句小て

備此の抑揚小
甚ふ妙事二
高天原と地下
事其意天
謂多奉此
海原の
用此の
大元此の
を人カ
之難心
と難心
と難心

云取たりと曰事あり
後釋小伊都阿神
紀万葉と小忌
祝詞考小薪して
事と如此とあり
不是あり
て物を煮炊く事と
處あり者
格々大殿祭詞小此
二高天原波青雲乃
者あり○神產巢日
皇產靈尊を其記小
白皇靈尊の亦御名
申奉る義あり其例
御祖命之聞ゆる
原段小其御祖伊須
へて申せらるあり
と有り其太子品陀
末あり伊豆志袁登
と有り此先小母と
き由を聞せたる者
皇祖母命と有り天
天皇前御紀小天皇
即位の御事御在し

又御紀の文法
御紀小尊皇
曰皇太后
朝其例あり
始小前朝の
后と尊出
給小御事
其皇太后
御祖と訓
事下小註有

申奉る義あり其例を
御祖命之聞ゆる大元
原段小其御祖伊須氣
へて申せらるあり訶
と有り其太子品陀和
末あり伊豆志袁登賣
と有り此先小母と云
き由を聞せたる者あり
皇祖母命と有り天
天皇前御紀小天皇即
即位の御事御在し坐

於豊財天皇曰皇祖母尊と有、右の尊皇后曰皇太后
と云例不同、其より皇祖母尊を以て御紀に書さ
せ給へり、天智天皇三年御紀に島皇祖母命と有、
明天皇の大御母小御在し坐て當今より大御祖母
にて渡らせ給へり、此等の皇祖母を須賣美於夜
と訓る、御祖母の上小皇の言り添れり、神名式
賀茂舊記及本朝文集
小御祖母多須玉依媛命と有、其丹塗矢小遇て生
奉らし、天神御子小對へて云あり、出雲風土記仁多
郡三津郷の下小大神大穴持命御子阿遲須杵高日子
命御須髪八握于生晝夜哭坐之辞不通、尔時祖命御子

乘船而率巡八十島云々、有る祖命、次小御祖と
有、了即其御母田心姫命の御事あり、神名式に山城國
愛宕郡賀茂御祖神社並名神大月と有、賀茂別雷神
の御母玉依姫命にて渡らせ給へり、事傳十五、三百八
十七、五十、卅、十五、丁、小注るが如く河内國讚良郡高宮
大社祖神社に高宮神社、大月次、の御母神と聞え阿波
國勝浦郡建島女祖命神社と有ふと、殊小目易く書
北たり、者あり、空穗忠社に小少き時ハ女親の事を
云々大和物語小若き時小女親ハ失給ひ小けり、継女
の手小在す、り、け、源氏葵、三十、小唯女親無子子

を置たりむ心ちして注小母無き子ありと有り冷標
二十小女親小離れぬる甚哀れある事小こ侍め
九丁小螢ハ小甚女親だちて繕ひ給ひ御氣ハ心を落窪
三小此帯カガ女親ハ左大将と聞えける御息左近少
將小て御在りけるをふむ養ひ奉りける又五女親の
御在せぬ小幸無き身と知て何で死むと思ふ心深
兼輔集小女親無き兒の云々と有ふと何れも女親と
云りけれハ御祖命ハ實小女祖命あり小違有る事
者あり此小就て男の方ふる小御祖と云事ハ有
真親小て其紆脈を受る謂あり可ふむ事傳十百上

此大國主神の
天之御舍
焼擧る火

二十小云共を合せ考ふ可き者あり記傳十卷十八
五丁小祖ハ母を云る例あり抑父の於夜ありハ本
の事ありハ母を云る殊小云る所以ハ子ハ母の許ハ
生長ハ事ハ觸ても父より親睦小同家小在る故小朝
暮の事ハ觸ても却祖と母を云るあり云と云
ハ理ハども父を指きて母を親睦トく為ると云ハ常
可
○登陀流ハ上六百三小注リ○天之新巢ハ上六百
三十七小注るが如く天之新宮と云事小て高天原小於
て神皇産靈尊の新宮を造りて御在り坐けるが國土
天御饗奉ら由と天神の所知食す程ハ云事
○凝烟ハ記傳十四六十小始煤唐韻云始煤灰集
屋也和名須くと有り万葉九三十九丁小廬ハ燎須と師競

△家々煤垂る
古く成小徒ひて
八拳成る者十拳
長くは奉公可
給へり係て申

之有を冠辞考小廬屋フク焼く火の煤と受たり」と云此
たり十一二十七丁小難波人葦火燎屋之酢四手雖有之有
る酢四の煤びの切りたり此も凝烟の事あり」と見
元ちるが如く此哥万葉小の讀人不知あつと拾遺悉
小出たりを三句を四の八拳成る者十拳成る者記傳十四十六丁小
煤垂れしと有り○八拳成る者十拳成る者記傳十四十六丁小
火を繁く燎き且凝烟の多き由の祝言あり諸於高天
原者と云る盛燎焼て烟の高く起登る事を甚しく
云る詞して宮造りを於高天原氷木高知と云と同意
なり次小地下者と云小對ひたれは唯上ハと云事を
強く言るあり略々云れたりが如く諸右小造天之御

舎と有るは其御舎の御事をころ云へりけれ然
る小高天原小御在し坐才神産巢日御祖命の天之新
巢を以て祓申せる此天日隅宮ハ出雲爪土記小神
魂命の御命以て專造り給へる趣ありけれ此と
以て云る小て此天御饗供奉らせ給ふ右の大國主
神の為小供奉れる新宮の御事小在けれども其宮
小て焼擧る火の烟の大空小棚曳き上りて高天原を
る神産巢日御祖命の天之新御巢新もて係りて其新巢
の煤ゆくる迄小天御饗と捧け供奉る可き由を申給
へる小て云信意ハ右七百四十四丁小注るが如く此膳夫と為

て仕奉る事ハ天神の詔命を奉りける事なれば此大
神ハ勤^レ仕奉る由と天神ハ所知念す許すと云
意を含めて称申させ給へり然らず此焼火の
事ハ就て其神の御名と殊更ハ如此く取立て申させ
給ふ可くも非りける者ありや記傳ハ然神産巢日
御祖命の新巢とい
於高天原者と云ふ因て假ハ設て云成るの事あり實
ハ唯此神の造れる大國主神の新^レ宮の御巢と云
ありと有れども然^レ無用の言と設て文と成る上古
の凡^レありず且其御巢の説ハ悉ハ謬^レなり事上六
百三十三丁ハ注^レ如く○燒舉ハ火と甚しく燒立
る事あり即天御饗の物を多く煮炊き仕奉る由少て
右ハ其烟氣の天上まで薰満て天神の新宮とも煤壘

す許ハ事の状を大ハ云ふも此燒立る火の太ありを
縁と爲て云ふあり借上古ハ其烟の立つ事を甚
しく豊饒へり事ハ爲つりあり先神武天皇戊午年
御紀頭齋せさせ御在り坐て嚴宍の糧を仕奉らせ給
ふ所ハ又火名爲嚴香來雷薪名爲嚴山雷之所見たり
ハ火を燒く事と甚く忌慎ませ御在り坐ける御有状
あり事右七百二十
十丁鑽出火の所ハ合せて見奉り知べき
あり景行天皇十二年御紀西征の所ハ時天皇南望之
詔群卿曰於南方烟氣多起と有^レ賊黨の竈の饒ハへ
る状を望見坐り由あり其證ハ仁徳天皇御紀四年ハ

詔群臣曰朕登高臺以遠望之烟氣不起於城中以為百
 姓既貧而家無炊者略中詔曰自今之後至于三載悉除課
 役息百姓之苦略中三稔之間百姓富寬頌德既滿炊烟亦
 繁之見之其七年小天皇居臺上而遠望之烟氣多起是
 日語皇后曰朕既富矣豈有愁乎皇后對詔何謂富焉天
 皇曰烟氣滿國百姓自富歟之見之是也於是炊烟の
 盛不起ると以て國の豊饒あり証し取らせ給へりふ
 り万葉一ハリ小天皇登香具山望國之時御製歌小國
 原波煙立籠海原波加萬目立籠冷何國曾蜻島八間跡
 能國者之有也其故事を思ふて詠せ給へりあり五

三附貧窮問答歌不可麻度柔播火氣布伎多受許之
 伎亦波久毛能須可伎互飯炊事毛和須礼提之有也右
 の友を詠る者あり備此ハ火を燒擧ると煤の八束
 垂ると云て烟の事をい其中小舎て知せたり者あり
 けれハ右等の事共ハ引合せて心得ずハ有へり
 たる者あり新古今賀ハ高き屋ハ外りて見れハ烟立
 津宮の御事ハ小新六帖ハ改ある今日と今年の
 始て民の竈ハ烟立添ふと有ふとも同ト意味あり
 者あり此等の事共ハ傳ハ卷六〇地下者ハ大殿祭詞
 百六十四丁竈神の下ハ云りき
 小此乃敷坐大宮地底津石根乃極美と有る是ハ御
 竈を居る地底の石根と云ふ右ハ於高天原と云ふ依

て此地底の事と甚しく云ふなり但古語拾遺小忽
遷化會恨地下と有る黄泉國の事小當たらむ其
國より小係て高天原小對いせたりとも見ゆめれ
とし然る非ず此唯其土地の底下あり事を大
小云る者ふり底津石根の事上三百四小注り○
市燒凝之多伎許良斯あり道詳本小多伎迦多末色と訓り
記傳十四五丁小竈の下の土燒けて石の
如く凝固する者あり其を甚しく底津石根までと云
ハ上へ登る事を高天原云ふと云ふ小同小出雲神賀
詞小白御馬能前足凡後足凡踏辛事波大宮能内外
御門柱乎上津石根踏堅下津石根踏凝之と有行

有り略下之有カ如し備上件此小至る迄ハ忌火を鑽て
天御饗の物を煮炊く由の稱稱行ふが此小て終めた
る者ハ非ず此次をハ放ちて見る可クず其鱸ハ
此小料理へて煮ハ焼ヒて奉ルる可クけれハ
あり高橋氏文小磐鹿六獨命申久六獨令料理天將供
奉止白天遣喚云人等為膾及煮燒雜造盛天云ハ為
供奉と有て下小豊日連乎令火鑽天此乎忌火止為天
伊波比由麻開天供御食と見えて煮るハ燒ハ其
忌火を被用たり狀あり小合せ考ハ不可クふむ記傳小
を奉る事と云て其火を鑽出る事を如此委曲御饗
云て其祝詞ハ載たり所以ハ上小大國主神の御

舎の事を白給へり御巢の事を主と請申し給へ
る故あり云々と云れり然る言なき御舎と御巢
とを別小爲られたる例の非あり○枘繩第一書小即以千尋枘
繩結爲百八十紬出雲風土記小千尋枘繩持而百結二
八十結二下而見元又記傳小引れたる齋明天皇
辛御紀小佐伯連枘繩云人名見元万葉五八十小水
沫奈須微命母枘繩能千尋尔母何等慕久良志都中務
集小枘繩の夏の日暮し難面て何ぞ如此長き命ある
りむ千五百番小宮居せし千尋枘繩君が爲長き命を
結び初夫木千三小千早振る千尋枘繩百結ひ打解て見は長き命とけむふと有り又後撰恋一小伊勢の海小延て
も余も枘繩の長き心我不勝れり新千載恋三小伊

勢の海の蟹の枘繩我方小心引ねば来る夜無
夫木十五小枘繩を千尋の濱の操返し是もや蟹の世
を盡すむ廿一小蟹の乾すて住し里小枘繩の長き恨も
今日不苦さと有ふと漁の事小用ふ延繩と云物
あり由次あり打延の下小注せるが如く此枘の事
ハ傳十九二百九十九丁 廿二百十丁 小己小云りき○千
尋繩ハ夫木廿三小得ぞ知ぬ千尋の繩を沈めても及
ハぬ海の底の心をと有を始として右小引る共小千
尋枘繩ふと云る是あり凡て物の長き事小千尋と云
ハ万葉十九十四丁 小投矢毛知千尋射和多之夫木二十

小那智の山雲居小見ゆる岩根く千尋小懸る瀧の
白糸拾玉小中々小百小九つ足ぬころ千尋小余る情
ありけ此類頼政集小君が代い千尋の底の細礫の鴉の
居る程小顕るいよであと見えて千尋ハ唯長き事と
云あり〇打延ハ古今恋一い伊勢の海の蟹の釣縄打
延て苦いこのいや思渡らむ拾遺長歌い延虫の釣縄打
延て引い聞いハ物ハ物ハいおど見えい釣縄を
打延い事いありい借此ハ古今雜下小思ひいや鄙いの長
路小衰へて蟹の縄縁いぎ漁い為いむいハい有ハ縄を縁いり
寄せて漁を為る事いして今いハ西國いハい手操い云いハ

新古今拾遺長歌の延虫の釣縄打延て見む
心も知らずや蟹の枿縄打延て見む

東國いハ延い縄い云いて縄いハ鉤いを多く垂置いて魚いの悉
小餅いを喰いて懸いりたいむいと思いハ程いハ縁いり寄い上いるい云
ありい顯昭密い勘い小多具いハ多具流い云いありい枿い縄いふど
云いハ此意いありい即多具い縄い云いハ多具流い縄い云いを略い
たいハ云いハ縁い縄いハ枿い縄いハ一いハ為いたるい誤いありい又右
の恋一いの初二句いを蟹いの枿い縄いハ作いて其説いハ云いハいハ蟹
の枿い縄いハ網い小著いたるい大縄いありい日本紀いハ枿い縄いハ
作り多具流い縄い云いありい網いハ十廿町遠いきい延置いて其
大縄いを引いけいハ苦いハ寄いめいなるいありい但万葉いハ網い手
縄いハ書いり但院御本いハ蟹いの釣い縄いハ有いり此いを魚いの釣い

を喰つれば釣の緒の繩を操寄せて魚を取云々唯蟹
 の釣繩打延て操る物ふれば打延て來ると云由小比
 へて詠ると侍しと注せる枅繩の説ハ誤ふれど次
 なる釣繩の事ハ實ハ謂れたり記傳十四五下追考ハ
 此ハ千尋の大繩を海中へ遠く引延へ置て一度ハ許
 多の魚を捕る釣して今世ハ海人の常ハ為る事ハ
 リ竹竿の末ハ細き緒著て為る尋常の釣ハ非ず然
 此ハ控依騰と云も此打延置たる大繩を一寄寄せて
 其ハ羅此ハ許多の魚を引寄せて取を云るありと云
 此ハ古ハ釣繩と云ハ今世ハハ手操と云延繩と云

云る是あり 但手操ハ網ハ地引と云外ハ奥ハ引
 皮を用ふ故ハ控繩と云云あり 万葉ハ網ハ繩
 之云ハ六卷三十下ハ四ハ津之泉即網ハ繩ハ有
 此を云ふ可き其ハ網ハ著たる網ハ此ハ有
 釣繩ハ更ハ由無ハ其雜下ハ有ハ繩ハ多岐ハ
 万葉九卷十一下ハ馬太伎由吉也ハ有ハ繩ハ多岐ハ
 行ハ事あり又ハ多具流ハ云ハ堀河後百首ハ鷄飼
 舟網子下す見ハ三穗ハ浦ハ急ハ網ハ多具流ハ長
 けリ曾丹集ハ三穗ハ浦ハ急ハ網ハ多具流ハ長
 さハ春ハ一日ありけリあハ有ハ此言ハ遊仙窟ハ
 縁細葛ハ縁字ハ多具理ハ訓ハ能當ハ然ハ多
 具ハ云ハ切ハ語ハ故ハ多具流ハ然ハ多
 叶ハさハを枅繩ハ一ハ為ハ大ハ僻事ハけリ
 ○為釣ハ都理須流と訓ハ上ハ五百ニハ注ハ如ク
 此ハ以釣魚ハ私記ハ津利須留字毛知互ハ訓ハ神武
 天皇戊午年御紀ハ釣魚於曲浦と有ハ釣魚ハ二

二万葉三手小揚面
 舟者釣為良下
 七手小四可能白
 水即乃釣船之
 十七手小奈吳能
 安麻能能能能
 流布祚波又四
 奈吳乃安麻能
 都利須流于天
 社又

字を合せて都理須と訓之其を古事記小為釣作と
 見え伊勢物語八十一段小塩竈小何時り來小けむ朝和
 釣為舟此所小寄ふむ古今惡十小伊勢の海釣す
 華の浮ふれや心一を定の難つる元輔集小蜚舟小
 釣せ小人も今日よりや千年を松の江小渡るるむふ
 と有り是訓例あり都理須流の記傳小為釣都良世流と訓へ
 釣有の意ありと云れりども然小非す上小天之新
 巢の煤垂る事を云りし將來はの事を係て如此しつ仕奉る
 可き由を申給へる常小小合せて此も追次で海人が釣す
 る鱸を以て天之真魚常小作小献らむと申給へるふれり

合為釣海人續
 葉九小鹿島
 在釣為海人
 又湯羅前釣
 海人手又丁三
 為海人之杖度
 所見十三行小
 能登之海小釣
 海部の古今
 伊勢の海釣
 老ク海ノ釣
 る心を定
 り難つる有

更小釣有の義非らあり又記傳小海人が釣れる鱸
 らば海人之為釣云り有下聞えずとも云れたり
 思ふ小此上小梯繩次の縁おて直小為釣
 と云て海人を下上置るのこて更小意小抱
 る程小非る可此即文の章を為す所ふれり
 海人之下小和名抄小白水即辨色立成云白水即
 和名今按云日本紀云用漁人二字一云用海人二字と
 阿萬見えたり此事神武天皇甲寅年御紀の傳小注す可
 一〇口大記傳十四六十小大口を寫誤りるふり可
 一萬葉小狼をも大口乃真神と續け云り借鱸を漢
 籍共小巨口細鱗と云り取と有小依て大口之の如く
 訓べ又云く又久知夫登とも訓べけれども此記小
 太ハ皆假字して布カの訓を書る例小違へり

又延佳本師本小久知毘呂と有り若比呂ふむ小
ハ廣字を書へく大と書て比呂と訓む例ハ無き事ふ
り云れつる小平田史小例を
外して久知夫登と訓るハ安あり
○尾翼ハ記傳十四
六十一小尾翼ハ小鱸の意ハ尾ハ借字あり儲小翼と
七丁
對云るを以ても上の口大ハ大口の誤ふる可き事を
思定む可し若て佗魚小比ぶる小此魚小翼と云計り
波多の殊小小き物ハ非れども大口小對へて言の
文小然も云べし取と云れたる如く波多の言ハ傳
十四一丁小已小注せり又思ふ小尾翼と大口と對へ
ずとも有ぬ可きハ文選上林小捷アゲ鱒ウツメ掉尾と云ハ次ふ
る意小通へる言ふりげ此ハ此ハ字の如く

尾と翼とて次の佐和と逆へ係る小こすハ有け
め其ハ此鱸ハし網ふと小入る時ハ鱒を以て切割
て逃る計り劇勇き物ふりけれハ尾翼の備りて活を活くた
る任ふる意意ふと小ヤ但記傳小若尾を正字と爲る
無てハ言足ハず尾も翼も万の魚小皆有る物あるハ
唯尾翼とのと云て何の意とも無ハ云と云れハ
ハ然る物ウハ次の佐和と云説あり
○鱸ハ志摩風土記小
答志郡伊佐部鱸敷神社事代主命也命得鱸祭天神地
祇之地と云事有と思ふ小此魚ハし殊小清々鮮り
ある物ハし在りハ神の御贄ハ専此物をハ供奉
れりハあり可し本草和名小鱸落明俗名鱸出崔魚和

名須二岐之所見たり記傳十四六十小和名抄小鱸雀
禹錫食經云鱸類似鯉而鯉大開者也四色字花云似鯉
而大青色和我名須木と有り万葉三十五小荒栲藤江
之浦尔鈴寸釣白水即跡香將見十一三十小鈴寸取海
部之燭火ふど詠り儲魚種多在中如此鱸を
しと云るハ出雲海小此魚殊小多く將佳きハ産出て
杵築神の御贄小奉り一小や風土記小ハ島根郡秋鹿
郡神門郡ふどの内小品ハ産物の中小須ハ枳ハ見え
たれども殊小多き事又佳き事ふどハ見えすと云れ
た今事ハ予ハ食ハ思ハ有ハと雖ハ然ハ由ハ見
た今事ハ予ハ食ハ思ハ有ハと雖ハ然ハ由ハ見

えず此ハ右ハ志摩風土記の
如き所以有て奉る者ふ可ハ○佐和ハ逆ハ仁
徳天皇三十年御紀小天皇歌曰兔藝泥赴椰摩之呂謎
能許久波茂知于智辞於明朋泥佐和ハ珥ハ儼ハ伊ハ齋
虚曾干知和多須耶餓波曳儼須企以利摩韋區例と有
る此大御歌古事紀ハ所見たるハ初二ハ槻根生山
皆背女のあり三ハ木ハ鋏持あり四ハ打ハ大根ハ打と
ハ畑ハ打を云ふ五ハ噪ハあり六ハ汝ハ家兄ハ二ハ
七八ハ打渡す弥木榮如すあり九ハ來入参來れと云
事ハを佐ハ珥ハ弥木榮如す來入参來れと云
へ係れを對致る小此の佐和ハ逆ハ次ハあり引寄

△持小相佐和仁誰
人可毛手尔將卷
知布士三小相伏九
吾欲云開未代本
背三有相佐和
の相達五佐和
ハ此の聲同
物不達て直噪
オ物為と平介
る義ある此言
ハ同

騰る形状を云るあり借此其控寄る海人の騒ぐ本よりの
事ふる小其控寄らるる鱸の騒ぎも異別特の時の事あり
さりけ此ハ鱸の事小係れる事云も更あり今も物
の動きの甚しきと邪和くくとも邪和都久とも云る
類是あり記傳十四六十ハ佐和くく逆ハ噪く小あり
万葉四十五小珠衣乃狭藍左謂沈十四二十ハ安利伎
奴乃佐恵くく之豆美と有も皆通音小て同言あり取
こ見元たり右の御紀の佐和くく珥と私記小師説左
立て云れハ波也加の也と清爽の義小注せるハ誤ふ當らざるあり○控依ハ記傳小澳より
渚へ挽令寄るあり祈年祭詞小八十綱打掛引寄如

事と有りて見元たるが如く○騰而ハ其澳より渚へ
挽寄せたる釣繩を魚と共小引擧る事あり今も綱又
ハ釣ふと小引擧ると云ふ是あり○打竹記傳十四十七
丁小打字舊事紀小折竹と作る小就て思ふ小折を誤
れる者小て佐伎陀氣ふる可く其紀ハ本より此記ふ
こを取て書る者小此ハ古本小折と有くと取れるが
後小彼ハ折小此ハ打小誤れるあり万葉七四十小吾
背子乎何處行目跡辟竹之背向尔宿之久今思悔裳と
見元たる此小辟竹と有て破れる竹を云あり補と有
が如く實小此ハ折竹を誤れるありけり然して此ハ

破れ^こ竹ハ能撓る物あり故小登遠^ニ登遠ニ^ハ近の
 發語あり又其割目を前小為れハ其背有^ガ如故小背
 向^ト云む發語^ト成れるあり又次小引る記傳の說
 小依る時ハ簣へ^ハ係れハ^ハありと背^ト云^ルあり可
 子^ハこころ〇登遠遠登遠近^ハ物と多く置^ク時^ハ其^ト
 引騰^ハ多^ク置^ク時^ハ眞^ニ和^シと^ハ置^ク簣^ハ撓^ル其^ト
 小成る物の撓む由あり記傳十四^ト小登遠^ハ多
 和^クこ同^トく^テ物の撓む狀と云ふ万葉八^ト小秋
 芽子乃枝毛十尾二降露乃十^ト三^ト小春去垂柳十緒妹
 心乘在鴨又^ニ十^ト秋芽子之枝毛十尾丹露霜置又^ニ十^ト
 秋芽子之枝毛十尾尔置露之又^ニ十^ト白杜杖枝母等子

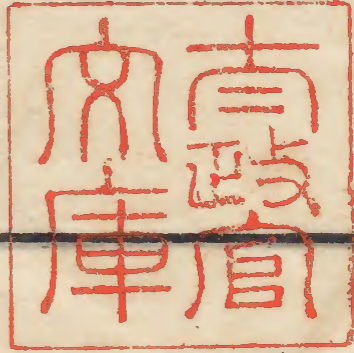
二小雪落者或云枝毛多和^ニ和十三^ト小引攀而峯文
 十遠仁林手折ふ^ト有^リ又^ニ十^ト小奈用竹乃騰遠依
 子等者三^ト四^ト十^ト小名湯竹乃十縁皇子七^ト九^ト十^ト小安治材
 十縁海ふ^ト有^リ撓^ル靡^クと云^リ偕此ハ折竹の簣上
 小數多の御贄の鱸と山の如く小積たる^ガ諸祝詞小
 神小供奉る物共と云小如横山打積置と云類して其
 竹の撓む計り多在る狀と云ふ可^ク竹簣小御贄を
 置く事ハ下卷哀祁命の御詠詞小魚^ト簣^トてふ事見元大
 嘗祭式小置簣と云物も出たり^ト略^トと云^ハ此^ハたりハ實小
 然る事して其置簣と云物ハ今も魚市の處小竹を編

て箕こ為る(割)其上小魚を積(置物料)て其事異此取
収め疊置く物ふ此此小(和)登遠之登遠ニ迹云
る其置箕の撓めるを去ふる可く其古小魚と箕小
置たる證和名抄漁釣魚具小(唐韻)云音語和名池
水中編竹籬養魚也有し活箕小て常ハ箕小置く事
ふ此此殊更小活置く為小水中小養ふ事ふ此
ごも猶箕の言を用ひたる者あり多和古今秋上
ぬ可き秋萩の枝も多和小置る白露拾遺冬不足引
の山路も知ず白樫の枝も多和小雪の降れ新
古今恋一小秋萩の下葉多和小置露の今朝明
秘急ぎ出めや家持集小玉貫き消す消す秋萩の
初霜の多和小置る白露新續支今秋下誰故不移る
はむと初霜の多和小置る白露新續支今秋下誰故不移る

あり又登遠伊勢物語十八段小紅小何
白雪の枝も登遠小降小見後撰秋中秋萩
の枝も登遠小成行小白露重置けありけり
おど有り多和小本あて登遠小未あり可きと古
く専登遠小云○天之真魚咋記傳十四下小
る何あり由小○天之真魚咋記傳十四下小
真魚咋麻那具比と訓べ魚を那と云鱈小用ふ
る時の名あり唯何と無く海川小在おどをハ字字こ
云て那と云ず此差別を辨得置べ持統天皇三年
御紀小ハ釣魚てふ蝦夷の名の訓註小魚此云儼之見
元万葉五二十下小多良志比賣可尾能美許等能奈都良
須等一云阿由都流等と有る此ハ釣魚ハ鱈の料あり
故小那と云り今世小と鮮る為る魚を須志那と云ひ

魚を鬻く屋を那夜云ふ 備菜も本は同言ふて魚も
在れ菜も在れ飯も割て食物を凡て那と云ふり菜と
魚とを別の言の如く思ふ 後の^{字も泥め}辨^ひり 今世も菜
字音もて佐伊と云時ハ魚も且ら如く古ハ那と云
ハ魚もハ菜も且れり又肴の那も魚ハ菜も且ら
事あり万葉十一 ^{四十} 丁ハ伊勢乃白水即之朝魚夕菜ハ
之有る是朝も夕も那ハ一ありハ魚と菜と字を替て
書るハ魚菜ハ涉る名ありハ故あり 其中ハ魚をハ殊
ハ賞て美き物と為る故ハ称て真那とハ云り 故麻那
ハ魚ハ限りて菜ハ且らぬ名あり 今世もハ麻那箸

麻那板あど云ハ魚を料理ふる具ハ限れる名あり 昨
と云名目ハ中昔の記傳録書ハ魚味と云ハ今俗ハ魚
類の料理と云程の事と聞ゆ ^補 意と有ガ如ク其咋ハ高
橋氏文ハ甚味清造欲供御食云と云有て御食ハ料
理へて供御^{キコシメ} 一ハむ程ハ成ハれるを云めり 其魚を麻
ハハ限らず傳十四卷二十九丁ハ注るか如ク真名
鹿ハ真菜鹿あり猪を為那と云ハ猪菜と云事ハ古
ハ食物ハ副て菜と為ハ由あり可ハ備和名抄厨膳具
小祖史記人^巻 為ハ刀祖我^巻 為ハ魚肉和名末奈以ハ太^巻 有^巻 空
穂藤原君^巻 四十六丁ハ小祖と云ハ魚作^巻 吹上下卷卅
一丁ハ小祖立^巻 魚鳥作^巻 云と云ハ宇治拾遺二卷九
丁ハ麻那箸削^巻 翰ありハ麻那と云證あり ○ 献也を記傳十
と有る實ハ魚をハ麻那と云證あり ○ 献也を記傳十
四十七丁ハ小多^巻 麻都良牟登麻袁志伎^巻 訓べ^巻 今正^巻



く献る時小常りて献らむと云事ハ新巢の凝烟のハ
 束垂まで云る如く後までを係て云ふ祝辞おれハ
 あり略下と云れし然る言ふて右七百三十九丁小注せるガ
 如く此櫛ハ玉神ハと水戸神之孫之有れしも實小
 ハ天穗日命の孫小當らせ給ひて天夷鳥命の子小坐
 して此大己貴神の天日隅宮小鎮ませ御在し坐小
 當りて其大神の祭祀を此小始めて行ひせ給ふ小就
 てハ長く遠く仕奉らせ給ひむ事を天之新巢の凝烟
 小寄せて申し其天御饗奉る事の盛ある由をか其魚
 を海中より取り事の影影しきを以て孫申されしおて

